ロビン・デンブロフのジェンダークィア理論から女性の定義問題を考える

西　條　玲　奈*

On the Theory of Gender Queer by Robin Dembroff from The Problem of Defining a Woman

SAIJO Reina*

Abstract

The paper aims to clarify the implicit assumption in a feminist issue regarding how to define a woman. It explores Robin Dembroff's theory of genderqueer, which is a critical social kind against the binary gender system prevalent in society. The argument is that the concept of a woman and that of a man is often accepted without a clear definition because it is a widely accepted category in society.

キーワード：分析フェミニズム，ノンバイナリー，ジェンダークィア，本質主義，種

Keywords：Analytic Feminism, Nonbinary, Genderqueer, Essentialism, Kind

1．はじめに

ロビン・デンブロフの論文「男女二元論を超えて」"Beyond Binary"（Dembroff 2019）では、英語圏のノンバイナリー当事者が公的に発表した発言(1)を基に、「男女二元論に対する批判的ジェンダー種であるジェンダークィア」という一つのジェンダーカテゴリーを定義する試みが行われている。デンブロフの論文が発表された翌年の2020年には中国語版が翻訳され(2)、日本語でも青本(2022)による紹介が出版されており、英語圏外での関心の高さもうかがえる。生まれた時に確認された外性器の形状をもとに固定的に二分化した男女のカテゴリーにあてはまらない人を表す言葉として、日本語ではもともと「Xジェンダー」があると同時に、近年では「ノンバイナリー」(nonbinary)という英語由来の表現も使われる。メディアを見ても2017年8月27日に『ハートネットTV』（Eテレ, NHK）ではXジェンダー当事者のドキュメンタリーが放送された。また2021年6月に日本の歌手がノンバイナリーであることをSNS上で発信したことも国内で反響を呼んだ。社会学の分野では武内今日子(2022)がXジェンダー当事者に対するインタビュー調査にもとづき、親やパートナーから期待される性別役割や異性愛規範との葛藤が記述されるなど学術的成果もある。こうした近年の日本語圏の動きはXジェンダー、ノンバイナリーの人々の可視化の動きとそれに対する注目度の高さの反映ともいえるだろう。

本稿では、分析フェミニスト哲学の文脈で登場したデンブロフのジェンダークィア論とそこで用いられる「批判的ジェンダー種」と「非批判的ジェンダー種」という概念を通じて、フェミニスト哲学が

＊工学部人間科学系列助教 Assistant Professor, Department of Humanities, Social and Health Sciences, School of Engineering

女性を主題の中心としてきたがゆえに「何を問わずにいられたか」を明らかにしたい。デンブロフの論考は「ノンバイナリーおよびジェンダークィアとは誰のことか」という問いを論じる試みだからこそ、フェミニズムにおける「女性の定義問題」のうちに、女性がある面では多数派だからこそ免除されてきた要素があることを浮き彫りにする。女性の定義問題とは、「女性とはPを持つ人だと定義するとPを持たない人は女性集団から排除されてしまうが、女性という概念に訴えなければ女性という社会集団が被る不正義の実態を説明できない」というジレンマのことである。デンブロフによるジェンダークィアの定義でも、これとよく似たジレンマが論文内で扱われる。しかし、両者の違いも大きい。ジェンダークィアというカテゴリーは定義を行うことと存在の可視化や社会への抵抗が強く結びつくが、女性というカテゴリーはあえて定義しなくてもその存在が社会で自明視されているがゆえに、定義そのものを放棄する戦略をとりやすいという違いである。このことを、デンブロフのジェンダークィアの定義、および定義の排他性に対する懸念を確認した上で示すことにしよう。

2. デンブロフによるジェンダークィアの定義とその特徴

デンブロフによれば、「ジェンダークィアとは、そのメンバーが男女二元論前提と衝突するジェンダーカテゴリーにいると感じているまたは望んでおり、かつこれに実存に基づいて集団として二元論前提に抵抗する批判的ジェンダー種である」(ibid., p.20)と定義される。定義項にはいつくか固有の意味を持つ用語が導入されている。その中でもとくにふたつの固有の概念を確認しておこう。(1)「批判的ジェンダー種」(critical gender kind)、そして(2)イデオロギーに対する「主義に基づく抵抗」(principled resistance)、と対比される「実存に基づく抵抗」(existential resistance)、である。

2.1 批判的ジェンダー種

まず、デンブロフのジェンダークィアの定義に登場する概念として重要なのが「批判的ジェンダー種」である。「批判的」とは社会の支配的イデオロギーに対して抵抗することを意味する。批判的ジェンダー種とは、「そのメンバーが集団として社会の支配的なジェンダーイデオロギーに抵抗する」(ibid., pp15-16)種とされる。反対に、そのメンバーが集団として社会の支配的なジェンダーイデオロギーを強化するジェンダー種は、非批判的ジェンダー種に分類される(ibid. p.17)。「社会の支配的なジェンダーイデオロギー」とは、「ジェンダーに対する、社会の中でもっとも社会的力をもった信念や概念や態度」(ibid. p.16 注55)のことであり、しばしば無反省に「より力をもたないコミュニティに…その共有を押し付ける」(ibid.)とされる。

この社会ではさまざまなジェンダーイデオロギーが存在するが、その一つが二元論前提だ。これは社会のメンバーは男性あるいは女性のいずれかに排他的に分類され、常に固定されるという前提のことである。ある時は男性だが別の時は女性であるとか、男性でも女性でもある、あるいはいずれでもないといったあり方は二元論前提のもとではありえない。Xジェンダー、ジェンダークィアやノンバイナリーというカテゴリーは、その存在じたいが二元論前提という社会の支配的なジェンダーイデオロギーに抵抗しているため批判的ジェンダー種のひとつになる。それに対して女性や男性というカテゴリーは二元論前提にそのまま合致するため非批判的ジェンダー種にあてはまる。

二元論前提への批判として特徴づけられることからわかるように、デンブロフの定義におけるジェンダークィアとは、「男女のグレーゾゾーンに位置すること」ではない。身なりやふるまい、発言や活動などを「女性」「男性」の規範に従って分類する慣習に抵抗することである。具体的な抵抗のあり方として、デンブロフは、英語のtheyのようにジェンダー中立的な代名詞を用いること、「パンセクシュアル」のようにセクシュアリティを表明するときに二元論前提を必要としない言葉を使うこと、男性的とも女性的とも読み取られない身体の特徴を備えること、女性的とされる装いと男性とされる装いを場面によって切り替えるといった事例をあげる。デンブロフによればジェンダークィアという種が集団としておこなう抵抗とは、特定の役割や特徴を受け入れないことではなく、人のふるまいを社会の

ジェンダー規範に即して男女どちらかに解釈して分類する社会的力の拒絶なのだ(ibid., 20)。

2.2　主義による抵抗と実存による抵抗の区別

ただし二元論前提に抵抗するというだけでは、ジェンダークィアの定義として不十分であるとデンブロフは議論を続ける。たとえばジェンダー中立的な代名詞を使うことは、その人の性別とは無関係に実践できる。そこで、デンブロフはジェンダークィアを定義するために、主義による抵抗と実存による抵抗を区別する。

主義に基づく抵抗とは、人が社会のジェンダー規範や差別的な社会構造などをのぞましくないと思う動機から出てくる抵抗のことである（ibid. p.16）。ジェンダーやセクシュアリティ平等を社会が実現すべきだという考えが動機となるので、その人がノンバイナリーや性的マイノリティの当事者であるか、女性であるか、そのアライであるかにかかわりなく行われる抵抗のかたちでもある。そうした抵抗のかたちには、バイナリーなジェンダー制度をよくないと思うから履歴書の男女別性別欄の撤廃を求める署名活動にサインする、セクシュアリティの多様性が認められるべきだからゲイパレードに参加する、女性への抑圧的な社会環境を変えたいから女子教育の充実をめざすNPOに寄付をする、といった行動があげられるだろう。

対して、実存による抵抗とは、社会の支配的なジェンダーイデオロギーに反するあり方が、その人自身の「自分はジェンダークィアだ」という感覚やそうありたいと望む欲求が動機となる場合である。ジェンダーに関わる自己の感覚や欲求という個人のあり方に由来する抵抗といえる。そのためジェンダー中立的な代名詞を用いることは男女二元論への抵抗の現れだが、その動機によって抵抗の種類は区別される。たとえば英語でジェンダー中立的な一人称代名詞”they”を使用する男性とノンバイナリーの2人の人物がいるとしよう。前者は日常生活で男性として過ごすことをことさら意識せずにすんでいるのだが、they を用いるのは英語の男女二元論に基づく用法は不当だと考えているからである。これは主義に基づく抵抗に分類される。一方で、後者がジェンダー中立的な代名詞を用いるのは、男女二元論から外れたところにいる存在だと受けとっているからである。自分あり方そのものが抵抗の源泉になる場合、それは実存に基づく抵抗と呼ばれるのである。

デンブロフは二元論前提に抵抗する女性や男性の個人が、ジェンダークィアのカテゴリーに含まれることがないよう、「実存に基づく抵抗を行う」という条項をその定義に加える。これによって、個人の在り方や自己理解といった要素もその定義項に含まれることになる。

3．デンブロフの定義をさらに検討する[5]

ここで、あらためてデンブロフのジェンダークィアの定義が、種として定義されている点に注目したい。実存に基づく抵抗をおこなうとき、それはジェンダークィアという種の「メンバーが集団として」と記されている。種、すなわち集団が抵抗の主体なのだ。しかし種はたんなる個体の集合以上の存在論的含意をもつ。分析形而上学において種という概念は、自然種に代表されるように、そこに属する対象の質的類似性や同一の因果的影響力などを説明し、なにかしら客観的な分類の根拠となる単位という意味で用いられる（cf. Loux 2017, p.20）。種はそこに属する個体に集まりには還元されない。もしジェンダークィアを種とし定義するなら、そこに属する個体の集まりとは数的にも異なる独立した対象としての種という存在へのコミットメントを含意することになる。ジェンダークィアという種は、それを構成するジェンダークィアである個々のメンバーに還元されないといってもよいだろう。しかしながら、種を個体の集合とは別の存在だとみなす立場は、一致のパズルと呼ばれるパラドックスや種とそこに属する個体の関係の説明など、形而上学的にいくつかの問題に直面する。[3]あえて理論的負荷の大きな種という概念を採用するところからも、デンブロフがジェンダークィアをそのメンバーに還元されないカテゴリーでありかつ社会的実在の一つだと暗に主張しているとも解釈できる。

以下では種と個体の関係の問題がいまだ説明されないまま残ることを確認しよう。ジェンダークィアである個人は何をもってジェンダークィアという種のメンバーだといえるのだろうか。つまり、こ

の種に帰属するための条件は何なのかという問題が生じる。デンブロフの論文中に明確な説明があるわけではないものの、いくつかヒントになる記述がある。「集団としての抵抗」という概念を手がかりに、デンブロフの定義に対して生じる帰属条件の問題を検討していこう。

3.1 「集団としての抵抗」とカテゴリーとメンバーの関係

「集団としての抵抗」という表現が重要なのは、デンブロフの定義が、ジェンダークィアである個人全員が何かしら社会に対して有効な抵抗活動をしなければならないという含意をもつことを避けるためである（ibid., pp.24-26）。もともとデンブロフは定義項に登場する「実存に基づく抵抗」について、ジェンダークィアのメンバーそれぞれが二元論前提への抵抗に成功することは前提としておらず、「個人がジェンダークィアであるには…そのような抵抗に加わる必要があるだけ」(ibid. p.15)と述べる。さらに、続けて何をもって抵抗に加わったことになるかは、文脈に依存する度合いが非常に高いため、厳密には定めないとする。個人がジェンダークィアというカテゴリーに属するその関係はさまざまだが、現実に二元論前提に抵抗するカテゴリーが実在するし、それは個人の集まりに還元されるものではないという事実をモデル化する。デンブロフの論文の要はここにあるように思われる。

しかしデンブロフは、ジェンダークィアの定義にそのメンバーが「抵抗に加わる」という条件に課すことには懸念が出てくるはずだと論じる。その人が内心「男女二元論の外部に自分をジェンダー化していると感じるかそうしたいと望んでいる」だけで十分ではないのかというものだ(4)。デンブロフ自身も述べるように、二元論前提の強固な社会にあっては、そこから逸脱して生きることはさまざまな危害や困難の原因となりかねない。望もうが望むまいが、二元論前提に沿ったかたちで生活せざるを得ない人はノンバイナリーを名乗ることもジェンダークィアであることもできないのか、と。いってみれば、二元論前提に違和感を持ちつつも自分のジェンダーアイデンティティについて沈黙した状態で生活する人を排除する定義なのではないか、という懸念である。

3.2 野球チームファンとのアナロジーを検討する

デンブロフの応答はジェンダークィアの定義に登場する「抵抗」とは、そのメンバー全員が各自行う抵抗ではなく、集団としての抵抗だというものだ。言い換えれば、構成員となる個人全員が必ずしも目に見えるかたちで抵抗を実践しなくてもよいと答える。これを説明するために、デンブロフは「野球チーム LA ドジャーズのファン」という社会集団とのアナロジーに訴える。あるチームのファンであるとは、そのチームを応援するために試合を観戦する、グッズを購入するなどの行動をとるだろう。しかしファンの中には、いわゆるファンらしい行動は取らず周りには秘密にしたままこっそり応援している者もいるはずだ。こうした人もまたファンの１人に含まれる。野球チームのファンとジェンダークィアのアナロジーが成立するなら、ある人がいっさい抵抗をとらなくても、内心男女二元論の外部に自分を位置づけている、またはそうしたいと欲している限りは、その人はジェンダークィアという種のメンバーになりうるはずだ、という応答である。

しかし、野球チームのファンとのアナロジーはうまく機能しているようには思われない。というのもアナロジーの説明内部ですでに矛盾が生じているように見えるからだ。デンブロフの説明によれば、ドジャーズファンというカテゴリーの定義には、ドジャーズの試合観戦やグッズの購入といった行動をとることが含まれる。一方、個人がこのカテゴリーのメンバーであるには、これらの社会的な行動なしでも可能であるという。しかし素朴に考えるとこれが両立可能とはいいがたい。というのも、一般に、あるカテゴリーを定義するとは、当該カテゴリーのメンバーとなる必要十分条件を与えることだからである。たとえば素数を「２と自分自身以外では割り切れない自然数」として定義した場合、この定義が与える条件を満たさない数は素数とはみなされないだろう。このような理解が正しいならば、ドジャーズファンの定義が性質 P1…Pn からもつことであるにもかかわらず、P1…Pn の性質を持たない人物がドジャーズファンカテゴリーのメンバーとして認められてしまうからだ。もし定義を満たさなくてもそのカテゴリーに属することが成り立つならば、ドジャーズファンというカテゴリーの定義が

いったい何を記述しているのか理解できなくなってしまうだろう。

こうした矛盾を解消する方法がないわけではない。その一つの方法は、カテゴリーの定義を選言的にとらえることだ。ドジャーズファンというカテゴリーは、ドジャーズの試合を観戦する、またはグッズを購入する、またはドジャーズの勝利を願う…などの性質の選言として定義するのである。この場合定義の中で列挙された性質のうち少なくとも一つを持つ人であれば、ドジャーズファンのカテゴリーに属することになる。ドジャーズファンのカテゴリーの定義となる選言の中に「ドジャーズの勝利を願う」という項目が含まれるならば、ひそかに応援しているだけでそれ以外の一切のファンらしい行動をとらない個人であっても、ドジャーズファンのカテゴリーのメンバーということになるだろう。定義の条件を選言ととらえることで、カテゴリーの定義とカテゴリーに帰属する条件を同一に保つことと、心の中でのみドジャーズを応援している人物もまたドジャーズファンのメンバーであることが両立可能になるのだ。

しかしデンブロフの提案するジェンダークィアの定義とそこに個人が帰属する条件を、たんなる定義項の選言とみなすわけにはいかない。「男女二元論の外部にあるジェンダーに分類されると感じているまたはそう望んでいる」という条項は個人でも満たしうるが、「二元論前提に対して集団として抵抗する」という条項は「集団として」という限定がともなう以上どうすれば個人が満たしうるか判然としないからである。ドジャーズファンとのアナロジーは、それがアナロジーである以上そのまま援用できる説明でないことは当然だが、種とそのメンバーの関係性をどう説明するかという問題はなお残されているといってよいだろう。論文で述べられているのは、個人がジェンダークィアに帰属する条件と、種としてのジェンダークィアが別の概念だということにとどまる。種の集団としての抵抗と、そのメンバーである個人の抵抗の有無が概念的に区別可能であるというだけでは、個人と種の関係について説明が不十分であると判断されるとしてもやむをえないだろう。

ただし、その不足は、理論的な不整合を意味するわけではない。改めて確認したいのは、なぜデンブロフが個人の心的状態のみではジェンダークィアというカテゴリーの定義として不十分だと考えるかである。というのも、その人が男女二元論の外部に自分をジェンダー化しているという認識、そうしたい欲求を持つことそれ自体が、二元論前提の抵抗とみなせるように思われるからである。このように心理学的な特徴だけでジェンダークィアという種を定義する立場をデンブロフが退けるのは、現在の社会はジェンダークィアに敵対的な場所が多いのは事実だが、もし言語表現や身ぶりや服装など、他人からも理解できるような二元論への抵抗がまったくできない世界では、ジェンダークィアは存在できないという点にある。というよりも、ジェンダークィアという集団が実際に「有害なステレオタイプや抑圧につながる二元論システムを拒絶」(ibid., p.21)し「この世界で人がジェンダー化されることの意味を解体する」(ibid.)存在であることを無視すべきでないという点にあるように思われる。その抵抗の現れは、本人にしかわからない心の状態にとどまらず、他人や社会のもつジェンダーの前提を揺るがす因果的な影響力を備えているはずだからだ。もしその違和感が一切他人に理解されえないものであるならば、抵抗として機能しないと考えているともいえるだろう。

総じて、デンブロフがジェンダークィアという種の定義と、個人がジェンダークィアという性質をもつための条件を区別するとならば、両者の関係について何らかの説明が必要だろう。他方で、種と種への帰属の条件を区別することで、定義がもつ排他性の問題を個人が二元論外部にいると感じているという心的な状態のみでジェンダークィアである余地を残そうとしているともいえる。

4.「ジェンダークィア」の定義問題と「女性」の定義問題と類似点と相違点

自分は男女二元論の外部にいると思っている、その内的状態だけでなぜ定義として不十分なのか。デンブロフが論じるジェンダークィアの定義に対するこうした懸念は、フェミニストが「女性」の定義をめぐって議論が交わされた本質主義論争とかた

ちの上ではよく似たところがある。同時に、ジェンダークィアというジェンダーカテゴリーは、デンブロフの言葉を借りれば、批判的ジェンダー種であり、「反批判的ジェンダー種」である女性とは政治的な位置付けがカテゴリーとして異なる。最後に、デンブロフのジェンダークィアが抱える「定義による排他性」の問題を、女性の定義問題との相違をもとに、その固有性を示すことにしたい。

4.1 定義問題に共通する課題：排他性

デンブロフの用語法にしたがうなら、フェミニズムが抵抗する支配的なジェンダーイデオロギーは、ジェンダーについての社会的前提といってよい。すなわち、人のジェンダーは社会の中で果たすべきとされる役割で決定するのであり、特に女性のものとされる役割が男性のものとされる役割よりも劣るという前提である。社会は人を男女に分類し、女性集団は男性集団よりも従属的という前提に抵抗する立場といってよい。いわゆる第一派フェミニズムにおいて、男性が手にするものとされていた財産権、参政権、教育を受ける権利を女性が獲得するための運動は社会の主体として女性集団を劣位におく社会に抵抗した事例である。

このようにフェミニズムは、女性という社会集団の存在を前提に、このカテゴリーを劣位におく社会制度や慣習に抵抗してきたし、いまも抵抗を続けているといってよい。しかしこの「女性」集団とはいったい誰のことなのだろうか。「女性」の定義ができなければ「社会は女性集団を男性集団よりも劣ったものとする」という主張の意味も、フェミニストたちはだれのための利害を考えて行動しているのか理解できないことになってしまう。リンダ・アルコフが「フェミニストのアイデンティティクラシス」(Alcoff 1988)と呼んだ問題である。

その一方、「女性」を定義することじたいが「女性に対する本質主義だ」という非難につながる。というのも、もし「女性とはしかじかの特徴を持つ人だ」という定義が成り立つならば、そのしかじかの特徴を持たないが、現実に女性である人を排除してしまうリスクがあるからだ。その排除のかたちは明示的なものと暗黙的なものとどちらもありうる。たとえば「女性とは妊娠の可能性のある人だ」という明示的な定義は、妊娠可能性がなくても女性である人を女性集団から排除してしまうし、女性でなくとも妊娠可能性のある人を誤って「女性」に分類してしまうことになる。暗黙的な事例をあげるなら、日本人女性が「在日コリアン女性が被る危害はセクシズムではなくレイシズムに属するものだ」と述べる場合、在日コリアン女性を暗黙に女性差別を被る女性集団から排除することになる。したがって、女性を定義することは排他性をもつ反面、女性を定義できない概念としたままではフェミニズムの基盤となる女性への差別を記述できないというジレンマに陥る。同時に、女性の定義を放棄することは、自らのべる「女性」が誰を指すのかあいまいにすることで、暗黙に排除している人たちの存在を消し去るリスクも持つ。端的な「女性」という表現に何も付け加えなければ、マジョリティの女性を指すものとして受け取られやすいからだ。

デンブロフのジェンダークィアの定義と女性の定義問題の類似点は、定義が持つ排他性を望ましくない帰結とみなすところである。フェミニスト哲学では明示的な定義そのものを批判する場合もあるが（cf. Kristeva 1980）、分析フェミニズムの中では定義に排他性が伴うことは受け入れつつ、その排他性がフェミニストの政治的目標に照らして問題の少ないものにしようとする事例もある（cf. Haslanger 2000, Jenkins 2016）。ここで各定義の詳細には立ち入らないが、これは近世以来の明晰さや整合性に価値を置く哲学の実践を重んじる分析フェミニズムの特徴といわれている(cf. Cudd 1995, p.3)。実際に定義したい概念がどのような対象を指すことに使われているかを記述することを基盤としつつ、特定の目的に照らしてその定義を改訂する方法は、しばしば改良的アプローチと呼ばれる（cf. Haslanger 2005）。

ジェンダークィアの定義によって懸念される排他性に対してデンブロフが応答していたことは、定義によって生じる排他性を認めつつ、ジェンダークィアの可視化と積極的な規定という政治的目標をかなえるためだと解釈できよう。その点は分析フェミニズムらしいアプローチといえる。デンブロフはジェンダークィアの積極的な定義を通じて、社会の二元論前提に抵抗し、人を男女のジェンダーに分類するコードを解体しようとする現実を示している。

種という存在論的に負荷の大きな概念を引き受けてでも、ジェンダークィアを種の定義と、個人がそこに属する条件を概念的に区別可能だと応じるのも、定義の排他性じたいに問題があることに自覚的だからこそだと思える。

4.2 定義問題の相違点：ジェンダー種としての差異

しかしながら、ジェンダークィアと女性の定義問題で生じる排他性の問題には、当然ながら異なる点がある。それは女性というジェンダーカテゴリーは、デンブロフの言葉でいえば、「非批判的ジェンダー種」、すなわちそのメンバーは集団として社会の支配的なジェンダーイデオロギーを強化するような種にあたる。そして女性というカテゴリーが強化するジェンダーイデオロギーとは、性別は男女という排他的なふたつのみであるという二元論前提だ。支配的イデオロギーによってあるべきものとされている以上、たとえフェミニストたちが「女性は定義できない」あるいは「定義すべきでない」とその定義を放棄しても、女性というカテゴリーはなお存在するものとして社会の活動は営まれていくだろう。そうだとすれば、フェミニストにとっては女性の定義を積極的に提案すること以上に、定義による排他性に着目することの方が政治的には重要な課題になったとしても不思議ではない。というのも、フェミニストが女性の定義がもつ排他性を指摘し、定義それ自体に懐疑の目を向けているあいだも、誰が女性であるかという問題に対して性器前提や二元論前提といった社会の支配的イデオロギーがその答えを用意してくれるからだ。その意味で、女性カテゴリーの場合、そのカテゴリーそのものが存在しなくなるという懸念に注意を払う必要がほとんどなかったといえるだろう。

ジェンダークィアの場合、状況は異なる。デンブロフはジェンダークィアを集団として支配的なジェンダーイデオロギーに抵抗する種だとみなしている。女性というカテゴリーじたいは、その意味するところが歴史上変化してきたとしても、社会に長らく存在してきたし、依然として存在する事実は変わりない。しかし、ジェンダークィアというカテゴリーは支配的イデオロギーによって多くの場面で存在しないものとして扱われやすい。そのため女性の定義のケースとは異なり、定義がもつ排他性の懸念のみならず、カテゴリーじたいを主張することが政治的に重要な目標となる。そのため、ジェンダークィアを定義しようとしたら、排他性の問題をクリアするだけでなく、カテゴリーそのものを明示化することが達成すべき目標となりうる。デンブロフは、当事者の発言を参照しながら、二元論への抵抗の方法として共通してよくみられるものを具体的に記述する。これも、ジェンダークィアというカテゴリーが社会に実在することを主張するためだと解釈できる。こうした抵抗のかたちを示すことはなるほど新しく規範として機能し、ジェンダークィアの多様なあり方を固定化するものにつながるかもしれない。しかし、それは支配的なジェンダーイデオロギーに保護されたものでない以上、女性や男性に対するジェンダー規範に比べて、不安定なものにならざるをえないと思われる。

以上の特徴を踏まえると、ジェンダークィアにとって、定義問題は、女性の定義よりも達成すべき課題が多くあることがわかる。すなわち、ジェンダークィアの定義の場合、そのカテゴリーが存続することを必要十分に説明するだけの実質的な定義を与え自分たちをどのような集団として可視化したいのか示すこと、定義の排他性を考慮すると、そして二元論前提にさまざまなかたちで抵抗するひとたちが現実に存在することを説明できるといったことである。それに対して、女性の定義問題の場合、排他性を回避さえすれば女性というカテゴリーの存続についてさして労力を割かなくて済む。女性についての反本質主義、すなわち女性の定義を拒否する傾向や、排他性を重くとらえて議論が行われたのは、女性が非批判的ジェンダー種だという前提があってのことといえる。

5. おわりに

このようにデンブロフの「二元論を超えて」におけるジェンダークィアの定義を検討した上で、女性の定義問題との類似点と相違点を確認した。ジェンダークィアや女性といった社会集団を定義することで、その定義項を満たさないものは集団から排除されるという排他性の問題が生じる点ではいずれも類似している。しかし、カテゴリーが支配的な

ジェンダーイデオロギーによって強化されるか、それに抵抗するかという相違点のゆえに大きな違いが出てくる。すなわち女性というカテゴリーは支配的イデオロギーである男女二元論に強化されるものなのでフェミニストが定義を放棄しても女性カテゴリーじたいが脅かされる懸念は少ない。一方でジェンダークィアというカテゴリーは社会で支配的な男女二元論と衝突するため、積極的な定義を行わなければ存在は無視されやすい。そのため定義を放棄して排他性の問題を回避するという方針を女性の定義問題の場合ほど容易には採用できない。

ジェンダークィアの定義問題から、フェミニストにとって女性の定義問題が、男女二元論というイデオロギーと親和的であり、そのために排他性が特に問題視されやすいことがわかった。しかし排他性の問題にのみ気を取られて女性の定義を放棄することは、フェミニストの取るべき道とは言い難い。というのも、女性という概念をあいまいで流動的なままにすることで、結局のところデンブロフのいう支配的イデオロギーに則った「女性」概念、すなわち性器前提や二元論前提に則した概念が流通するままに任せることになりかねないからだ。暗黙に前提される女性概念を明らかにしてこそ、そこで誰が排除されているかをはじめて理解できるといってもよい。フェミニストが性差別の是正を目指す以上、差別を被る社会階級として、また社会的アイデンティティの一つとして「女性」が何を意味するかを批判的に分析することは今後も重要であり続けるはずである。

註

(1) 雑誌などメディアに掲載されたインタビューを使用する理由を次の 2 点に求める。第一に、ジェンダークィア・ノンバイナリーの統計的なデータがほぼ存在しないこと、第二に社会のマイノリティの観点から概念を定式化することはフェミニスト哲学の政治的な方針に合致することである。(Dembroff 2019, pp.3-4)

(2) 罗宾·登布罗夫(Robin Dembroff)「超越二元论:性别酷儿(genderqueer)作为批判性性别种类 」译者:許顓項, 2020, https://philpapers.org/archive/DEMBBG-3.pdf, (2023 年 9 月 11 日アクセス).

(3) 一致のパズルとは、複数の数的に異なる物理的対象が同一の時空的位置を占めることはできないが、そう主張せざるを得ないというパラドックスである。この場合、種と個体が二つの異なる対象に該当する。関連して、種は個体と異なり、因果的影響を被らない非物理的対象なのか、また種は色や形などのほかの性質と区別されうるものなのか、といった問題も生じるだろう。

(4) デンブロフはその人の心的状態などからジェンダーを規定するアプローチを内在主義、社会でその人がどう受け取られるかという観点から規定するアプローチを外在主義と呼ぶ(ibid. p.4)。この懸念は内在主義から予想される批判でもあるだろう。デンブロフ自身は内的アプローチと外的アプローチの一方のみでは不十分として自身の理論を構築する。

(5) 3 節以降の執筆にあたり小西真理子、安井絢子、平出喜代恵、筒井晴香、渡辺一暁（敬称略、順不同）からの助言を参考にした。

参考文献　等

Alcoff, L. (1988). Cultural feminism versus post-structuralism: The identity crisis in feminist theory. Signs: Journal of women in culture and society, 13(3), 405-436.

Cudd, A. E. (1995). Analytic feminism: A brief introduction. _Hypatia_, 10(3), 1-6.

Dembroff, R. (2019). Beyond binary: genderqueer as critical gender kind. _Philosopher's Imprint_.1-31.

Haslanger, S. (2000). Gender and race:(What) are they?(What) do we want them to be?. Noûs, 34(1), 31-55.

---(2005). What are we talking about? The semantics and politics of social kinds. Hypatia, 20(4), 10-26. In *Resisting Reality*, OUP, 2012.

Kristeva, J. (1980). Woman can never be defined. in Isabelle De Courtivron & Elaine Marks (eds.) , *New French Feminisms: An Anthology*, 137-41.

Loux, M. J., & Crisp, T. M. (2017). Metaphysics: A contemporary introduction. Routledge. Smith, Q. (1988). 'The Logical Structure of the Debate about McTaggart's Paradox,' in L. N. Oaklander & Q. Smith (Eds.), *The New Theory of Time* (1994, pp. 202–10), New Haven: Yale University Press.

青本柚紀. (2022).「二つではない性別を生きる人たちは性別をどう捉えているのか？」, 稲岡大志・森功次・長門裕介・朱喜哲編『世界最先端の研究が教えるすごい哲学』, 総合法令出版, 199-203.

武内今日子. (2021). 「「X ジェンダーであること」の自己呈示―親とパートナーへのカミングアウトをめぐる語りから」. 『ジェンダー研究 お茶の水女子大学ジェンダー研究所年報』, 24, 95-112